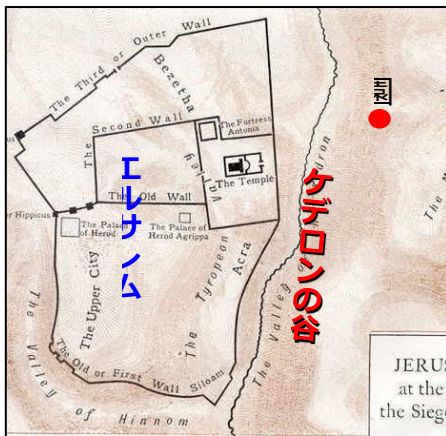


## 「ケデロンを越えて」

ヨハネの福音書 18:1~9

### はじめに

十字架にかかれる前夜、弟子たちとの最後の晩餐を終えられたイエシュアは、彼らを連れてある場所へと向かわれます。その場所について筆者であるヨハネは「ケデロンの川筋の向こう側」と呼んでいます。ケデロンの川とはエルサレムの東に面した場所で、深い谷になっていました。このケデロン川に水が流れるのは雨期（12



月~3月)の時期だけで、イエシュアがこの川を渡られたのは過ぎ越しの祭り(3月中旬~4月中旬)の時期でしたので、この時すでに水は流れておらず文字通り「ケデロンの川筋」しかなかったと思われます。いずれにせよイエシュアはそこを渡って行かれました。しかし他の福音書ではこの場所について「オリーブ山」あるいは「ゲツセマネ(オリーブの搾油器の意)」と呼んでいるのに対し、ヨハネの福音書だけが敢えてこのような呼び方をしているのはなぜでしょうか。その意図を探りつつ、今日の内容に入ってみたいと思います。

### 1. ダビデの都落ち

【新改訳改訂3】

ヨハネ

18:1 イエスはこれらのことを話し終わられると、弟子たちとともに、ケデロンの川筋の向こう側に出て行かれた。そこに園があって、イエスは弟子たちといっしょに、そこに入られた。

イエシュアは弟子たちを引き連れてケデロンの川筋、谷を渡って行かれました。この時のイエシュアと弟子たちのように、かつてこのケデロンを渡って行った者の姿が旧約聖書に描かれています。

【新改訳改訂3】

Ⅱサムエル記

15:12 アブシャロムは、いけにえをささげている間に、人をやって、ダビデの議官をしているギロ人アヒトフェルを、彼の町ギロから呼び寄せた。この謀反は根強く、アブシャロムにくみする民が多くなった。

15:13 ダビデのところに告げる者が来て、「イスラエル人の心はアブシャロムになびいています」と言った。

15:14 そこでダビデはエルサレムにいる自分の家来全部に言った。「さあ、逃げよう。そうでないと、アブシャロムからのがれる者はなくなるだろう。すぐ出発しよう。彼がすばやく追いついて、私たちに害を加え、剣の刃でこの町を打つといけないから。」

15:15 王の家来たちは王に言った。「私たち、あなたの家来どもは、王さまの選ばれるままにいたします。」

15:16 こうして王は出て行き、家族のすべての者も王に従った。しかし王は、王宮の留守番に十人のそばめを残した。

15:17 王と、王に従うすべての民は、出て行って町はずれの家にとどまった。

15:18 王のすべての家来は、王のかたわらを進み、すべてのケレテ人と、すべてのペレテ人、それにガテから王について来た六百人のガテ人がみな、王の前を進んだ。

15:19 王はガテ人イタイに言った。「どうして、あなたもわれわれといっしょに行くのか。戻って、あの王のところにとどまりなさい。あなたは外国人で、それに、あなたは、自分の国からの亡命者なのだから。

15:20 あなたは、きのう来たばかりなのに、きょう、あなたをわれわれといっしょにさまよわせるに忍びない。私はこれから、あてどもなく旅を続けるのだから。あなたはあなたの同胞を連れて戻りなさい。恵みとまことが、あなたとともにあるように。」

15:21 イタイは王に答えて言った。「【主】の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにいます。」

15:22 ダビデはイタイに言った。「それでは来なさい。」こうしてガテ人イタイは、彼の部下全部と、いっしょにいた子どもたち全部とを連れて、進んだ。

15:23 この民がみな進んで行くとき、国中は大きな声をあげて泣いた。王は**ケデロン川**を渡り、この民もみな、荒野のほうへ渡って行った。

この出来事は、ダビデ王の時代、ダビデの息子の一人であったアブシャロムの謀反によってエルサレムを離れるダビデ王とその部下たちについて記した「ダビデの都落ち」と呼ばれる箇所です。この時「国中は大きな声を上げて泣いた」と記されています。このように「ケデロン川を渡る」とは、非常に大きな悲しみを意味する表現だと考えられます。そしてその内実はダビデがエルサレムを出て行くことによる、民がダビデ王との別離を悲しみ、別れを惜しむ悲しみです。この時の弟子たちの気持ちがまさにそうだったと考えられます。御父のみもとに行くために、自分たちのもとから離れて行かれるイエシュアを惜しむ悲しみ、それが「ケデロン川を渡る」という描写の中に表されていた弟子たちの思いであったと考えられます。さらにこの「ケデロン(קֶדְרוֹן)」というヘブル語がそれを表していると考えられます。ケデロンはヘブル語でカーダル(קָדַר)「暗くなる、嘆く、悲しむ」という意味の動詞からできており、まさしくその名の通りの出来事が起こっていることが解ります。

## 2. エリヤの戦い

しかしイエシュアが十字架で死なれ、そして弟子たちから離れて御父のみもとに行かれることは神様のご計画の失敗、敗北ではありません。全くその逆です。カーダルはそのことも指し示していると考えられます。列王記 I 18 章に聖書で最初にカーダルが使われた時の出来事が記されています。

【新改訳改訂3】

I 列王記

18:36 ささげ物をささげるところになると、預言者エリヤは進み出て言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、【主】よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなたのしもべであり、あなたのみことば

によって私がこれらのすべての事を行ったということが、きょう、明らかになりますように。

18:37 私に答えてください。【主】よ。私に答えてください。この民が、あなたこそ、【主】よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださることを知るようになしてください。」

18:38 すると、【主】の火が降って来て、全焼のいけにえと、たきぎと、石と、ちりとを焼き尽くし、みぞの水もなめ尽くしてしまった。

18:39 民はみな、これを見て、ひれ伏し、「【主】こそ神です。【主】こそ神です」と言った。

18:40 そこでエリヤは彼らに命じた。「バアルの預言者たちを捕らえよ。ひとりものがすな。」彼らがバアルの預言者たちを捕らえると、エリヤは彼らをキシオン川に連れて下り、そこで彼らを殺した。

18:41 それから、エリヤはアハブに言った。「上って行って飲み食いしなさい。激しい大雨の音がするから。」

18:42 そこで、アハブは飲み食いするために上って行った。エリヤはカルメル山の頂上に登り、地にひざまずいて自分の顔をひざの間にうずめた。

18:43 それから、彼は若い者に言った。「さあ、上って行って、海のほうを見てくれ。」若い者は上って、見て来て、「何もありません」と言った。すると、エリヤが言った。「七たびくり返しなさい。」

18:44 七度目に彼は、「あれ。人の手のひらほどの小さな雲が海から上っています」と言った。それでエリヤは言った。「上って行って、アハブに言いなさい。『大雨に閉じ込められないうちに、車を整えて下って行きなさい。』」

18:45 しばらくすると、空は濃い雲と風で暗くなり、やがて激しい大雨となった。アハブは車に乗ってイズレエルへ行った。

これは北イスラエルの王アハブの時代、神様は彼と彼の妻イゼベルの行った偶像礼拝を怒られ、預言者エリヤを通して3年の間雨が降らないことを宣言された箇所です。そして3年後、エリヤを用い、全イスラエルの前でバアルの預言者450人、アシェラの預言者400人との（天から火を呼び下すという）勝負に勝利させた直後の出来事で、大雨を降らせた「濃い雲と風で暗くなる」にこのカーダルが使われています。このように、カーダルにはエリヤを通して3年の間雨を降らせないと言われたように、「神様が宣言された通りになる」ということ、そして「神様が遣わされた者が勝利を収めること」が示されていると考えられ、イエシュアの十字架がまさにそれに値すると考えられます。エリヤの勝利によって全イスラエルが神様に立ち返ったように、イエシュアの十字架によって、信じるすべての者が救われるということが示されていると考えられます。

### 3. 園

18:2 ところで、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスがたびたび弟子たちとそこで会合されたからである。

このケデロン川の向こうにあった「園」は、イエシュアと弟子たちにとって特別な場所であったようです。そこはイエシュアと弟子たちが「たびたび会合」していた場所であったとあります。わずか三年半という公生涯の中で、イエシュアが弟子たちを連れて何度も同じ場所を訪れるというのは、非常に珍しいことだと考えるべきです。それはすなわちイエシュアがそこで弟子たちと交わることを何よりも好んでおられたということだと考えられます。「会合」と言うと少し固いイメージを持ててしまいますが、ここは神殿でもなければシナゴーグ（ユダヤ人の集会所）のような場所でもありません。また客と主人、給仕役などの関係が発生する誰かの家

でもありません。ここは誰もが対等でいられる自由な語らいの場、また家族の団らんのような、イエシュアと弟子たちだけの親しい交わりの場、憩いの場所であったと考えられます。筆者ヨハネはこの場所をケデロン川の向こうにある「園」と記していますが、これをヘブル語でガン(גן)と言い、本来ガンは四方を柵や壁で囲まれ、隔離された、今でいう庭園や公園に近い場所を指します。他の福音書によればここはオリーブ山ですが、筆者ヨハネはこの場所は他の場所とは違う、イエシュアと弟子たちが交わった特別な場所であり、もはや隔離された空間であることを示すためにガンすなわち園という言葉を使ったと考えられます。そしてこの言葉が聖書で最初に使われるのはやはり創世記 2 章の「エデンの園」です。

【新改訳改訂 3】

創世記 2:8 神である【主】は東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。

「エデンの園」、それは神様が人を「置かれる」場所であることが解ります。つまり神様がお決めになった、人が居るべき場所、生かされる場所であるということです。人は自分が行きたい場所に行き、したいことをしようとしています。しかし神様がなさりたいこと、神様のご計画のために、神様がお決めになった場所に、神様がお決めになった人が置かれるためには、その人が自分の願うようではなく、神様に聞き従うことが必須条件となります。ですから「エデンの園」とは単なる場所のことではなく、「神様と、神様に聞き従う人」との関係、繋がり、交わり、結びつきのことを指し示していると考えられます。神様のなさりたいこと、神様のご計画とはそのような関係、繋がり、交わり、結びつきであることを示すために、筆者であるヨハネはこの場所をオリーブ山ともゲツセマネとも記さず、敢えて「園」と記したと考えられます。

ケデロンは大きな悲しみを指し示していると述べました。その大きな悲しみという名の川の川筋、つまり実際には水のない川、川であって川でない川、つまり本来ならば悲しむ必要のない悲しみ、なぜならそれを越えたところにある「園」という大きな喜びがあるから、というメッセージを込めてイエシュアはこの谷を渡られたのではないのでしょうか。

その場所にイエシュアを裏切る者、イスカリオテ・ユダがやって来ます。後の 18:4 で「イエスは自分の身に起ころうとするすべてのことを知っておられた」とあります。ですからイエシュアは、ユダがここにご自分を裏切るためにやって来ることもご存知でした。つまりイエシュアがユダをこの場所に導かれたのです。そこにはユダがイエシュアと他の弟子たちとの親しい交わりの楽しさを共に分かち合ってきたことを思い出して、悔い改めることを願ったイエシュアのユダへの思いがあったのではないかと思われます。

18:3 そこで、ユダは一隊の兵士と、祭司長、パリサイ人たちから送られた役人たちを引き連れて、ともしびとたいまつと武器を持って、そこに来た。

イエシュアと弟子たちの親しい交わりの場所、特別な場所であった「園」に、ユダはその手にともしびとたいまつとそして武器を持ってやって来ました。ともしびとたいまつは、暗闇の中、引き連れて来た兵隊と役人たちを導くため、つまり指導者、リーダーとしての証しです。そして武器は、当然イエシュアと弟子たちと戦うため、敵としての証しです。「園」へと導いたイエシュアの思いはユダにはまったく届かなかった、いや届いたにもかかわらず、それに対して彼は武器で、敵意で応えたのです。

#### 4. イスカリオテ

18:4 イエスは自分の身に起ころうとするすべてのことを知っておられたので、出て来て、「だれを捜すのか」と彼らに言われた。

18:5 彼らは、「ナザレ人イエスを」と答えた。イエスは彼らに「それはわたしです」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らといっしょに立っていた。

「ユダも彼らといっしょに立っていた」この「立っていた」の「立つ」という言葉はヘブル語でアーマド(אָרְמָד)と言います。この言葉が聖書で最初に使われているのが創世記 18:8 です。

##### 【新共同訳】

創世記 18:8 アブラハムは、凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして、彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした。

ここで「そばに立って」と訳されているのがアーマドです。このようにアーマドとは「そばに立って給仕する」、受け入れてもてなす、しもべのように仕えるという意味があると考えられます。ですからイスカリオテ・ユダにとってイエシュアはもはや主人でも師でもなく、イエシュアの敵であるサタンが彼のアーマド、立って仕える主人であり師となったことが示されていると考えられます。この時点でイエシュアとイスカリオテ・ユダとの関係は完全に決裂しました。これを最後にこのユダについて、筆者ヨハネは一切記していません。それはもはやユダがイエシュアについて、神様のご計画においてまったく関わりのない存在となったことを示していると考えられます。

因みにイスカリオテ(אִשְׁכּוֹרְיֹתָא)とは人、男性を意味するイーシュ(אִישׁ)とケリヨテ(町の名前)の合わさった言葉で「ケリヨテの男、ケリヨテ人」という意味があると考えられ、ケリヨテとは異教の国モアブにあった町で、高台に築かれた堅固な要害の町でした。ケモシュという偶像がまつられた神殿があったとされています。アモス書の預言に、このケリヨテの町についての言及があり、そこにユダの最期が表されていると思われます。

##### 【新改訳改訂3】

アモス 2:2 わたしはモアブに火を送ろう。火はケリヨテの宮殿を焼き尽くす。モアブは、どよめきのうちに、角笛の音と、ときの声のうちに死ぬ。

ユダだけではありません。イエシュアに敵対するものはすべてこのような最期を迎えることになるのです。それが滅びと呼ばれるものです。またケリヨテはキルヤテ(קִרְיָתָא)訳すと「都、町」という言葉が語源となっていると考えられ、イスカリオテとは「人の町」つまり神様によってではなく、神様のご計画によってでもなく、人が人のために、人によって建てた町と解釈することもでき、そのような町すなわち、このイスカリオテ・ユダのように、神様に対して、イエシュアに対して敵となる町は、やがて必ず滅びることが示されているとも考えられます。



## 5. ナザレ

18:6 イエスが彼らに、「それはわたしです」と言われたとき、彼らはあとずさりし、そして地に倒れた。

18:7 そこで、イエスがもう一度、「だれを捜すのか」と問われると、彼らは「ナザレ人イエスを」と言った。

「ナザレ人イエス…それはわたしです。」というメッセージが二度繰り返されています。そしてそれによってイエシュアを捕えに来た兵士や役人たちが「あとずさりし、地に倒れた」と記されています。つまり「ナザレ人イエス」この名に力と権威があるということだと考えられます。ではそこにどんな意味が込められているのでしょうか。「ナザレ人」これはもちろんナザレ(נָצְרֵת)という町の人という意味で、人としてのイエシュアはこの町で育てられました。ナザレにはネーツェル(נֶצְעַר)「芽、若枝」という意味の言葉が語源となっているとも考えられますが、ユダが引き連れて来たのは 800 人近いローマ帝国の兵隊です。彼らを押し返して地に倒す言葉としては少々意味合いが異なります。ナザレには他にこのような意味があると考えられます。それはナーツァル(נָצַר)、訳すと「守る、保つ、見張る」という意味の動詞からくる言葉であるということです。このナーツァルが聖書で最初に使われた出来事が出エジプト記 34 章のモーセの十戒の場面です。

### 【新改訳改訂3】

#### 出エジプト記

34:1 【主】はモーセに仰せられた。「前と同じような二枚の石の板を、切り取れ。わたしは、あなたが砕いたこの前の石の板にあったあのことばを、その石の板の上に書きしるそう。

34:2 朝までに準備をし、朝シナイ山に登って、その山の頂でわたしの前に立て。

34:3 だれも、あなたといっしょに登ってはならない。また、だれも、山のどこにも姿を見せてはならない。また、羊や牛であっても、その山のふもとで草を食べてはならない。」

34:4 そこで、モーセは前と同じような二枚の石の板を切り取り、翌朝早く、【主】が命じられたとおりに、二枚の石の板を手に持って、シナイ山に登った。

34:5 【主】は雲の中であって降りて来られ、彼とともにそこに立って、【主】の名によって宣言された。

34:6 【主】は彼の前を通り過ぎるとき、宣言された。「【主】、【主】は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、

34:7 恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」

34:7 の「恵みを千代も保ち」という部分にこのナーツァルが使われています。それは神様がお選びになった民に与えられた神様の恵み、みことばが、永遠に失われることがないように、誰にも奪われることがないように「守る」ことを意味していると考えられます。もはやイエシュアの敵となったユダが引き連れて来た敵の軍勢に対して、その危害が弟子たちに及ぶことがないように、わたしがナーツァルすなわち「守る」というイエシュアの宣言だったと考えられます。

## 6. イエシュア

次にイエシュアという名についてですが「イエシュア(יֵשׁוּעַ)」という名は、ヤーシャ(יָשָׁע)「救う、助ける」

という意味の動詞が語源であると考えられ、このヤーシャが聖書で最初に使われているのが出エジプト記 2 章の出来事です。

【新改訳改訂第3版】

出エジプト記

2:16 ミデヤンの祭司に七人の娘がいた。彼女たちが父の羊の群れに水を飲ませるために来て、水を汲み、水ぶねに満たしていたとき、

2:17 羊飼いたちが来て、彼女たちを追い払った。すると、モーセは立ち上がり、彼女たちを救い、その羊の群れに水を飲ませた。

2:18 彼女たちが父レウエルのところに帰ったとき、父は言った。「どうしてきょうはこんなに早く帰って来たのか。」

2:19 彼女たちは答えた。「ひとりのエジプト人が私たちを羊飼いたちの手から救い出してくれました。そのうえその人は、私たちのために水まで汲み、羊の群れに飲ませてくれました。」

2:20 父は娘たちに言った。「その人はどこにいるのか。どうしてその人を置いて来てしまったのか。食事をあげるためにその人を呼んで来なさい。」

2:21 モーセは、思い切ってこの人といっしょに住むようにした。そこでその人は娘のチッポラをモーセに与えた。

これはモーセが、後に彼の妻となるチッポラとその姉妹に危害を加えようとする者たちを追い払い、「救い出す」場面ですが、ここで使われているのがヤーシャです。このように、ヤーシャとは自分の妻となる者を敵から守り、養い、そしてともに住むことを指し示していると考えられます。

このように「ナザレ人イエス」という名には敵から「守る、救い出す」という意味があり、「それはわたしです」と宣言されたイエシュアの前に、敵は追い払われる「あつさりし、地に倒れる」ことが表されたと考えられます。

18:8 イエスは答えられた。「それはわたしだと、あなたがたに言ったでしょう。もしわたしを捜しているのなら、この人たちはこのままで去らせなさい。」

18:9 それは、「あなたがわたしに下さった者のうち、ただのひとりをも失いませんでした」とイエスが言われたことばが実現するためであった。

「この人たちはこのままで去らせなさい。」「あなたがわたしに下さった者のうち、ただのひとりをも失いませんでした」とあるように、イエシュアは弟子たちを敵から守り、救い出されたのです。「ナザレ人イエス」、神様が遣わされた御子である御方がこの名を名乗り、「それはわたしです」と言われた以上、この御方を受け入れ、信じる者は、たとえ地上最強の軍隊が、サタンの軍勢が敵となっても、必ず守られるのです。現にこの場で弟子たちは、800 人近い武装したローマの軍隊に取り囲まれたにもかかわらず、傷一つ負わなかったのです。

## 7. 最後に

今日の最初の部分で、ケデロン川を渡って都落ちしたダビデの話をしました。その時ダビデがエルサレムを離れた理由がこの時のイエシュアの思いと重なります。

### 【新改訳改訂3】

#### サムエルⅡ

15:14 そこでダビデはエルサレムにいる自分の家来全部に言った。「さあ、逃げよう。そうでないと、アブシャロムからのがれる者はなくなるだろう。すぐ出発しよう。彼がすばやく追いついて、**私たちに害を加え、剣の刃でこの町を打つといけないから。**」

ダビデは臆病だったわけではありません。逃げることで、「ケデロン川を渡る」ことで、自分の愛する者たち、国民を、部下を、家族を敵から守ったのです。筆者であるヨハネが、オリーブ山ともゲツセマネとも記さず、敢えて「ケデロン川を渡る」という表現にこだわったことの真意が、「ナザレ人イエシュア」すなわち神様は「守り、救い出す」御方であるというメッセージが、今日の箇所全体に貫かれていると考えられます。そんなイエシュアに対して、私たちは何と答えるべきでしょうか。その答えが同じくケデロン川を渡ったダビデ王の箇所を示されています。それはダビデの部下となっていたガテ人イタイが語った言葉です。

### 【新改訳改訂3】

#### サムエルⅡ

15:19 (ダビデ) 王はガテ人イタイに言った。「どうして、あなたもわれわれといっしょに行くのか。戻って、あの王 (アブシャロム) のところにとどまりなさい。あなたは外国人で、それに、あなたは、自分の国からの亡命者なのだから。

15:20 あなたは、きのう来たばかりなのに、きょう、あなたをわれわれといっしょにさまよわせるに忍びない。私はこれから、あてどもなく旅を続けるのだから。あなたはあなたの同胞を連れて戻りなさい。恵みとまことが、あなたとともにあるように。」

15:21 イタイは王に答えて言った。「【主】の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにいます。」

イタイはイスラエル人ではなくガテ人、すなわち異邦人の亡命者でした。しかし彼はダビデの、王のそばにすることを懇願したのです。「あなたのそばにイタイ」と言ったのです。後に彼はダビデの全軍の三分の一を任される者となります (サムエルⅡ 18:2)。これは私たち異邦人の教会、クリスチャンの型です。このように願うなら、求めるなら、王は、イエシュアは、私たちをともに歩ませ、守り、養い、そして多くのものを任せてくださるのです。しかしその旅路は決してやさしいものではないかもしれません。ケデロン川を渡ったダビデのように、悲しみが伴うものかもしれません。実際にこの後ダビデが歩んだ道も厳しい荒野の道でした。しかし私たちの王は「ナザレ人イエシュア」すなわち私たちを「守り、救い出す」御方であることを覚えましょう。

「ナザレ人イエシュア」、その御名によって、これからも私たちが守られ、養われ、ともに歩むことができま



すように。そしてイエシュアと御父との親しい交わりの場、究極の「園」である神様の国、御国に入ることができますように。